特集❷シリーズ・高齢者への交通安全教育　第2回 自転車利用者編

運転免許※を保有していない高齢者への自転車教育を

平成24年の自転車乗用中の交通事故死傷者数を年齢層別にみると、 高齢者（65歳以上）が占める割合は17.6％。しかし、死者数だけに限ってみると、高齢者は64.7％を占めている。このように、高齢の自転車利用者が事故に遭うと死亡事故につながりやすい。シリーズ第2回は高齢の自転車利用者への指導の参考となる情報を紹介する。 ※四輪・二輪（原付含む）の運転免許

公益財団法人 国際交通安全学会では昨年3月に「子どもから高齢者までの自転車利用者の心理行動特性を踏まえた安全対策の研究」についての報告書をまとめた。プロジェクトリーダーを務めた帝塚山大学心理学部の蓮花一己教授は、この研究の中で実施した高齢の自転車利用者に対する行動特性の観察調査結果に基づいて、高齢者への自転車教育のあり方を提言している。

免許保有者と非保有者の安全行動の違いは何か

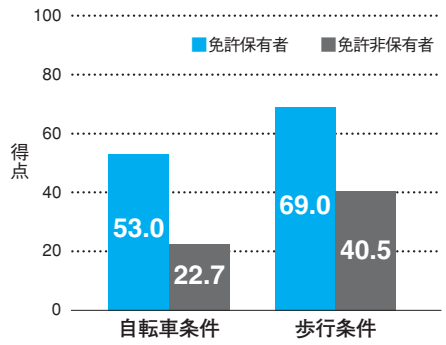
「先行研究で、運転免許を保有していない高齢者は保有している高齢者に比べると、はるかに事故に遭いやすいことが指摘されています。そこで、自転車乗用中における免許保有者と非保有者の行動がどのように違うのかを比較検証しようと考えたわけです」と蓮花教授は調査の目的を話す。調査は、奈良県にある自動車教習所のコースで、62～94歳（平均年齢72・6歳）の高齢者48名（免許保有者21名・非保有者27名）が参加して行われた。参加者はジャイロセンサを取り付けたヘルメットを着用し、自転車で指定されたコースを走行。さらに、同じコースを参加者に歩いてもらう。コースの途中の交差点など8ヵ所に測定箇所を設け、参加者の自転車条件と歩行条件それぞれでの安全確認行動（交差点での左右確認回数と確認の深さと長さ）などを調べた（確認行動の生起時間や確認方法を計測し確認得点として算出）。

自転車乗用中は歩行中より安全確認が不足する

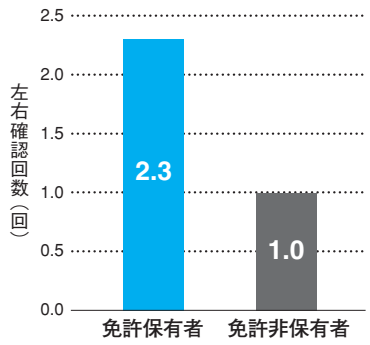
免許の有無による高齢者の交通行動の特徴を明らかにするために、すべての測定箇所を集約し、自転車条件と歩行条件の確認総得点を比較。どちらの条件においても、免許保有者のほうが非保有者より得点が高かった（グラフ1）。参加者の走行状況はビデオカメラでも撮影しており、左右確認回数を解析したところ、免許保有者のほうが非保有者の約2・3倍の確認行動をしているという結果となった（グラフ2）。

「免許保有者は非保有者に比べ、安全行動の水準が高いことが明らかになりました。また、保有者・非保有者ともに、自転車条件のほうが歩行条件より確認得点が低くなっていることから、自転車に乗っている時に安全確認が不足する傾向が示されたといえます。これは自転車が不安定な乗り物で、高齢者の方は特にバランスをとることに集中してしまうため、安全確認や一時停止などへの意識が希薄になるのではないかと考えています」と蓮花教授は分析する。

●グラフ1
免許の有無別による自転車条件と歩行条件の確認総得点の比較



●グラフ2
免許の有無別による自転車の平均確認回数



免許を保有している高齢者は、免許取得時の教育やその後の運転経験によって、適切な運転技能や安全知識が習得されており、これにより自転車乗用中にリスク回避の行動をとることができると解釈できる。

「自転車の走行実験でも、免許をお持ちでない方は信号のない交差点、特に見通しの悪い場所を左右確認しないまま横断するという特徴が見られました。こうした行動を改善するための指導が必要だといえるでしょう。さらに、同じ高齢者でも免許保有者で一定の運転経験を有するリーダーが非保有者を指導するサポート体制も重要であると考えています」と蓮花教授は指摘する。「免許非保有者へ指導する際に注意してほしいのは、抽象的な事故パターンに基づく教育パンフレットの使用があまり有効ではないということ。これは高齢者がパンフレットに掲載されている交通場面と、自分が生活している地域にある危険箇所とを結びつけにくいからです。そのため、受講者が普段通行する交差点等における危険要因と安全な通行方法を具体的に示すことが効果的といえるでしょう」。

帝塚山大学心理学部の蓮花一己教授

高齢者を自転車教育の指導者役に認定

高齢者を含む自転車利用者への教育を充実させるために、安全意識の高い高齢者の力を活用しているのが兵庫県加古川警察署である。同警察署は昨年11月、管内に住む4人を加古川シルバーサイクルマスターとして認定。シルバーサイクルマスターは、高齢者や子どもを対象にした交通安全教室（昨年11月から今年7月にかけて22回開催）で自転車教育にあたっている。「当警察署管内で発生した人身事故の約3割は自転車が関係したものです。取締りの強化もありますが、やはり教育が大切であると考え、中村信幸・前交通官がこの制度を企画しました。同じ住民の目線からの啓発活動を期待しています」と加古川警察署の小國豊和・交通第一課長は話す。

シルバーサイクルマスターとして活動しているのは大西佐久央さん（73歳）、沼田一美さん（69歳）、吉田保さん（68歳）、小里文男さん（73歳）。4人は昨年9月に開催された兵庫県交通安全高齢者自転車大会にグループで出場し、準優勝という成績を収めた。4人は日頃はクルマを運転することが多いため、大会に出場するまで自転車に関してはあまり詳しくなかったそうだ。

大会への出場が自転車の指導に活きる

「大会に向けた練習を通じて、自転車が私たち高齢者にとってバランスのとりにくい乗り物であることを再認識しました。このような自転車の特性と守るべきルールをきちんと理解することができました。この時の経験が今、自転車の指導を行う上で役立っています」と小里さんは振り返る。

「指導している時は、自分の話が相手に理解されているか確認しながら進めるように心がけています。また、自分が指導する立場になったことで、より交通安全を意識するようになりました」と大西さんは気を引き締める。

加古川シルバーサイクルマスターの4人。左から、大西佐久央さん、沼田一美さん、吉田保さん、小里文男さん

「クルマを運転していて、高齢の方が危ない運転をしているのが気になっていました。そうした方々を少しでも減らしたいと思い、活動に協力しています」と吉田さんはいう。

「歩行者の延長で自転車に乗っている方が多いように感じます。だから、右側通行や信号無視を平気でやってしまう。自転車はクルマの仲間であることを一人ひとりが意識すれば、自転車事故は減っていくはずです。それを多くの方に理解してもらえるよう、私たちも努力していきたい」と沼田さんは力強く語った。

4人が出場した高齢者自転車大会は兵庫県以外の多くの地域でも開催されている。こうした大会への出場は高齢者の安全意識を高めるきっかけとなる。そして、大会で好成績を収めた高齢者に指導者として活躍してもらうという加古川警察署のシルバーサイクルマスター制度は地域の中に交通安全のリーダーをつくる上で、たいへん有意義な取組みといえるだろう。

加古川シルバーサイクルマスターは高齢者や子どもを対象にした交通安全教室で活躍